

ローマはビジョンを打ち立てる - ナンバー・シックス

アドベンチスト史における預言論争：ダニエル書11章36節をめぐるユライア・スミスとジェームズ・ホワイトの対立を理解する

Jeff Pippenger
2024-08-14

私たちは、1798年から現在に至るアドベンチスト運動の歴史の中で起こってきた、預言をめぐる論争の六つの流れを取り上げています。

歴史と預言において、神の御言葉は真理と誤りの間に長く続いてきた闘争を描いている。その闘争はいまなお進行中である。これまでにあった事柄は繰り返される。古い論争は再燃し、新しい理論は絶えず生じてくる。しかし、第一、第二、第三の天使のメッセージの宣布にあたり、預言を信じ、その成就に参加してきた神の民は、自分たちの立場を知っている。彼らは精金にもまさる尊い経験を持っている。彼らは、初めの確信を終わりまで堅く保ち、岩のように堅く立つべきである。『Selected Messages』第2巻、109ページ。

前回の記事ではローマの権力をめぐる最初と最後の論争を取り上げ、今回はユライア・スミスとジェームズ・ホワイトの間で起こった論争を取り上げる。ユライア・スミスは第36節に自分の「私的解釈」を挿入した。

第36節 その王は自分の意のままに行い、自らを高め、すべての神々にまさって自分を大いなる者とし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成就するまで栄える。定められたことが行われるからである。

ここで取り上げられている王は、直前に言及されたのと同じ勢力、すなわち教皇権を指すものではありえない。というのも、その勢力に適用すると、記述された諸条件が当てはまらないからである。Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 292.

スミスは、前の節にある権力は「教皇ローマ」であると認めたが、三十六節の特徴は教皇ローマを特定する預言的特徴ではないと主張する。その主張は誤りである。1863年の反逆において、レビ記二十六章の「七つの時」は退けられ、したがってハバククのもの表における七つの時の表現も拒絶された。1843年と1850年の両方の図表は、図表のまさに中心に七つの時を描き、両方の図は七つの時の線の中心に十字架を置いている。1856年に七つの時の新しい光が到来し、その後それが退けられたとき、それはハバククのもの表の拒否であり、また両方の図表が神によって導かれたことをきわめて明確に示している。予言の霊の權威の拒否でもあった。

ホワイト夫人によれば、サタンの最後の欺きは神の御霊の証しを無効にすることであり、ここでの最初の欺きもまた神の御霊の証しを無効にすることだった。そしてそれは、二つの図表に示された基礎的な真理、とりわけ七つの時を同時に退けることをも意味していた。

1863年の反乱の際、「七つの時」の線を取り除いた1863年の偽造の図表を作成したのは、ほかならぬユライア・スミスであった。1863年までにユライア・スミスは「七つの時」の光に目を閉ざし、ダニエルが二つの「憤り」を特定していることが見えなくなっていた。その二つの「憤り」は、イスラエル北王国とユダ南王国に対する「七つの時」を表している。最初のもは北の十部族に対するもので、紀元前723年に始まり1798年に終わり、二つ目は紀元前677年に始まり1844年に終わった。

ダニエル書8章で、ガブリエルはマラーの幻を説明するためにダニエルのもとに来た。そしてその働きに関連して、1844年を裏づける第二の証言を与えた。ダニエル書8章の二千三百年は1844年に終わったが、北方と南方の王国に対する二つの憤りのうち最後のものも、同様に1844年に終わった。

彼は言った。「見よ、わたしはこの憤りの終わりに何が起こるかをあなたに知らせよう。終わりは定められた時に来るからだ。」ダニエル書 8:19。

最後の終わりは最初の終わりを前提としている。二つの憤りのうち後者は、七つの時を別の表現で言い換えたにすぎず、1844年に終わり、前者は1798年に終わった。スミスが教皇権を特定する記述はないと主張したその節は、教皇制が致命的な傷を受ける年を示していた。

その王は自分の望むところのままに行い、自らを高くし、あらゆる神々の上に自分を大いなるものとし、神々の神に逆らって驚くべきことを語り、憤りが成就するまで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:36

三十六節の「王」は、「憤りが成就するまで栄えるであろう」。教皇権は三十六節を成就するための要件を満たしていないと主張するスミスが、同じ書物でダニエル書8章23節と24節について何と記しているかに注目せよ。

23節. 彼らの王国の終わりの時、背く者たちの罪が満ちるとき、凶悪な顔つきをし、難解な言葉を悟る王が立ち上がる。24節. 彼の力は強大となるが、自分の力によるのではない。彼は驚くべき仕方で滅ぼし、栄え、思うままにふるまい、力ある者と聖なる民を滅ぼす。25節. さらに彼はその策略によって欺きをその手に栄えさせ、心の中で自らを高くし、平和によって多くの者を滅ぼす。彼はまた君たちの君に対して立ち上がるが、人の手によらずに碎かれる。

この権力は、やぎの王国の四つの分割の後を継いで、その王国の末期、すなわち彼らの歩みが終局に向かうころに現れる。もちろん、それは9節以降の小さな角と同一である。9節に関する説明で示したとおりにそれをローマに当てはめれば、すべてが調和し明瞭になる。

「陰しい顔つきの王。」モーセは、同じ勢力からユダヤ人に下る懲罰を予告するにあたり、それを「陰しい顔つきの国民」と呼んでいる。申命記28:49、50. 軍事的陣容において、ローマ人ほど畏怖すべき姿を示した民はいなかった。「難解な言葉を解する者。」モーセは、先に言及した聖句で、「その言語をあなたは理解できない」と言っている。これはユダヤ人に関して、バビロニア人やペルシア人、あるいはギリシア人については言えない。なぜなら、カルデア語やギリシア語は、多かれ少なかれパレスチナで用いられていたからである。しかし、ラテン語についてはそうではなかった。

「背く者たちの罪が満ちるに至ったとき」、一貫して、神の民と彼らを虐げる者たちとの関係が意識されている。彼らが捕囚に売り渡されたのは、神の民の背きのゆえであった。そして、彼らが罪にとどまり続けたことが、さらに厳しい罰を招いた。ユダヤ人が国家として道徳的にこれほどまでに墮落していた時期は、ローマの支配下に入ったときほど、かつてなかった。

「強大だが、自分自身の力によるのではない。」ローマの成功は、同盟者の支援と敵方の分裂に多くを負っており、彼らはそれをいつでも利用する構えであった。教皇ローマもまた、自らが霊的支配を及ぼしていた世俗権力によって強大であった。

『彼は驚くべきほどに滅ぼすであろう』。主は預言者エゼキエルを通してユダヤ人に、彼らを『滅ぼすことに巧みな者ども』に引き渡すと告げられた。そして、ローマ軍によるエルサレムの破壊の際に110万人のユダヤ人が虐殺されたことは、その預言者の言葉の恐るべき確証であった。さらに、ローマは第二の、すなわち教皇制の段階において、五千万人の殉教者の死に責任があった。

「『また彼は、その政策によって、謀略をその手中にはびこらせる。』ローマは、謀略を旨とする政策において他のあらゆる権力を凌ぎ、その手段によって諸国を自らの支配下に置いてきた。これは異教ローマにも教皇ローマにも当てはまる。こうして、平和によって多くの者を滅ぼした。」

そしてローマはついに、その総督の一人を通して、イエス・キリストに死刑判決を下すことによって、君たちの君に敵対した。「しかし、彼は人手によらずに碎かれる」という表現は、この権力の滅亡を第2章の像が打たれる出来事と同一視している。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』、202-204。

スミスは、この箇所でも二度にわたり、異教ローマと教皇ローマの預言的特質は相互に入れ替え可能であると述べている。というのも、それらはローマの二つの局面における現れにすぎず、たとえばダニエル書2章の鉄と粘土の混合のようなものであり、ホワイト夫人はそれを教権と政権の象徴だと指摘しているからである。スミスが取り上げている節で、ダニエルはローマが「栄え、行い」、またローマが「その手において奸計を栄えさせる」と述べているが、スミスは、三十六節の「憤りが成就するまで栄える」その「王」が、異教ローマと教皇ローマの双方の預言的特質を示しているのだと主張する。そして彼は、三十六節におけるローマのどの特質も教皇権を指してはいないと主張する。

私たちは、ローマを「幻を成就しようとする暴虐な者」と同定することを支持するためにスミスに言及してきた。また、十四節にある四つの預言的特徴の一つは、ローマが自らを高ぶらせることである。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14。

スミスは、三十六節における王の記述は教皇権と一致しないと主張している。しかし彼は先に、十四節では自らを高めるのはローマだと論じていた。それでもなお、三十六節の王は「自らを高めるであろう」。その同じ王は三十六節で、「神々の神に逆らって驚くべきことを語るであろう」。ダニエル書では教皇権は「いと高き方に逆らって大いなることば

を語るであろう」とされ、ヨハネの黙示録では教皇権はいと高き方を冒瀆する。

また、彼には大言壮語と冒瀆を語る口が与えられ、また四十二か月の間、活動を続ける権威が与えられた。そして彼は、神に対して冒瀆するために口を開き、その御名と神の幕屋と、天に住む者たちを冒瀆した。黙示録 13:5、6。

教皇権に関するあらゆる予言的記述は第36節に見いだされる。

その王は自分の望むところのままに行い、自らを高くし、あらゆる神々の上に自分を大いなるものとし、神々の神に逆らって驚くべきことを語り、憤りが成就するまで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:36

人間の注解者は多くの場合信頼できないが、多くのアドベンチストの注解者は、使徒パウロが「罪の人」に言及したとき、テサロニケ人への第二の手紙で言い換えていたのは三十六節であったという明白な真理を証言している。

いかなる手段によっても、だれにもあなたがたを惑わされてはならない。なぜなら、その日は、まず背教が起こり、そして滅びの子である罪の人が現れないかぎり、来ないからである。彼は、神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに反対して自らをそれらすべての上に高め、神であるかのように神の神殿に座し、自分が神であることを示すのである。テサロニケ人への第二の手紙 2:2,3

36節は「彼は自らを高め、すべての神々の上に自分を掲げる」と述べており、パウロもまた「罪の人、滅びの子が現れる。その者は、神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに敵対し、それらすべての上に自らを高く掲げる」と言っている。明らかにスミスには、36節の王が、36節に至るまでの節で論じられている王とは異なると主張するための予言的権威はなかった。文法的にも、その誤った適用を正当化する根拠はなく、また、36節には教皇権の特徴が見られないからそうしたのだという彼の主張は、独自の解釈を打ち立てようとして聖書を曲解したものだだった。

また、私たちは、さらに確かな予言のことばを持っています。暗い所で輝くともしびに目を注ぐように、それに注意を払うのは、あなたがたにとって良いことです。やがて日が明け、明けの明星があなたがたの心に昇るその時まで。まず第一に知っておくべきことは、聖書のどの予言も私的な解釈に基づくものではないということです。というのも、予言は昔、人間の意志によってもたらされたのではなく、神の聖なる人々が、聖霊に動かされて語ったからです。第二ペテロ 1:19-21

ラオデキア的アドベンチズムの年月を通じて、スミスの解釈（適用）が正しいのか誤っているのかに言及してきたアドベンチストの神学者、牧師、著者は数多くいた。オーストラリアの牧師で、すでに久しく故人となっているルイス・ウェアは、その奉仕の大半をスミスの誤った予言モデルに反対することに費やした。彼が反対した理由は、スミスが最終的に四十五節でその終わりを迎える王をトルコだと特定したからというだけではなく、スミスの枠組みがハルマゲドンの誤った適用を生み出したからである。1980年代ごろ、アドベンチストの著者が『アドベンチストとハルマゲドン—私たちは予言を誤解してきたのか？』という本を著した。著者の名はドナルド・マンセルで、その本は今でも入手可能である。

マンセルは第一次世界大戦と第二次世界大戦に至る歴史をたどり、両戦争の開戦が近いと見なされたとき、アドベンチストの伝道者たちが、ハルマゲドンと世の終わりのしるしとして、トルコが文字通りエルサレムへ行軍するというスミスの誤った適用を用い始めたことを示している。彼はまた、教会の会員名簿によって、各戦争の開戦が近づくにつれて、多くの魂が、スミスの欠陥のあるハルマゲドン観に由来する伝道者たちの預言的強調に基づいて、アドベンチスト教会の会員に加えられたことを示している。

いずれの戦争が終結したときにも、誤った預言は成就せず、教会はスミスが構築した預言モデルによって獲得した信徒数よりも多くの信徒を失った。

ミラー派の根本的なメッセージをスミスが退け、さらに『ダニエル書』の三十六節から四十五節に関する自身の独自解釈を広めようとする姿勢を通じて、スミスの論理は時事に基づく預言モデルを生み出した。

ダニエル書11章の最後の節で終わりを迎える王をめぐるスミスとジェームズ・ホワイトの論争において、ジェームズ・ホワイトは、スミスの砂上の預言的土台を端的に言い表す論理を提示した。ホワイトは「預言が歴史を生み出すのであって、歴史が預言を生み出すのではない」と教えた。

二度の大戦の前に活動したアドベンチズムの伝道者たちは、展開しつつあった歴史の推移を利用してスミスの欠陥のあるハルマゲドンの預言モデルを提示したが、戦争に至るまでの時期には非常に祝福されているかのように見えたその働きも、その預言モデルが私的解釈に基づくものだと証明されたとき、差し引きでは損失を生んだ。

偽預言者に気をつけなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は獐猛な狼である。あなたがたは彼らをその実によって見分ける。人は茨からぶどうを、またあざみからいちじくを集めるだろうか。同様に、良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはできず、悪い木が良い実を結ぶこともできない。良い実を結ばない木はみな切り倒され、火に投げ込まれる。だから、彼らはその実によって見分けられる。マタイによる福音書 7:15-20。

三十六節において王に関する独自の預言的モデルを提唱するスミスの姿勢は、第六の災いとハルマゲドンの誤った適用をも生み出す結果となった。

第六の御使いはその鉢を大いなるユーフラテス川に注ぎ出した。するとその水は枯れた。これは、東の王たちのために道が備えられるためであった。私は、蛙のような三つの汚れた霊が、竜の口から、獣の口から、偽預言者の口から出てくるのを見た。彼らはしるしを行う悪霊であって、地上の王たち、すなわち全世界の王たちのもとへ出て行き、全能の神の大いなる日の戦いに彼らを集めるのである。見よ、わたしは盗人のように来る。目を覚まし、自分の衣を守る者は幸いだ。そうすれば、裸で歩くことにならず、その恥を見られることもない。そして彼らは、ヘブライ語でアルマゲドンと呼ばれる場所に集められた。ヨハネの黙示録 16:12-16。

以前にも指摘したように、第六の災いは人類の恩恵期間が閉じられた後に来ます。したがって、そこに含まれている「衣を守れ」という警告は、ミカエルが立ち上がり、人類の恩恵期間が閉じられて第一の災いが始まる前に起こる試練の問題を指していなければな

りません。第六の災いは、まもなく到来する日曜法のもとで一つに結集する三者連合である竜と獣と偽預言者の活動を示しています。その三者連合こそが現代のローマであり、現代のローマの三者連合を識別し確立する象徴は、「あなたの民を略奪する者たち」で、彼らは「幻を確立しようとして自らを高め」「倒れる」のです。

第六の災いの警告は、理解されると、魂は自分の衣を保つことができるが、退けられると魂は裸にされる。これはラオデキア人の五つの特徴の一つである。その警告を確証する象徴は「あなたの民の略奪者たち」であり、彼らは自らを高くし、ついには倒れる。ソロモンは、神の民がその幻を持たなければ滅びると言った。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18.

ヘブライ語の「perish」は「裸にする」を意味し、ヨハネは「見張り、衣を保つ者は幸いである。裸で歩くことのないように。そうでなければ、その恥を見られてしまう」と記した。スミスは「北の王」について間違っており、その偽りの預言的基盤が、受け入れられれば裸をもたらすような預言的適用を彼が展開することを可能にした。そしてその裸は、主の口から吐き出されるラオデキア人の象徴である。

スミスは、女預言者の夫ジェームズ・ホワイトに対して、北の王の新たな誤った比定を掲げて論戦を挑むのに何のためらいもなかった。アドベンチストの歴史家たちも、ホワイト夫人も、この有名な意見の相違について述べている。エレン・ホワイトは、ダニエル書11章における「北の王」が誰を指すのかという見解の相違を公の場に持ち出したことについて、夫とスミスの双方を戒めた。1844年の大失望の直後に出た最初のアドベンチストの刊行物で、ジェームズ・ホワイトは次のように記した：

私は、1844年の第七の月に、イエスが立ち上がって戸を開け、日の老いたる者のもとに来て、その御国を受けられたことを、全く信じている。ルカ13:25、マタイ25:10、ダニエル7:13, 14を見よ。しかし、ダニエル12:1にあるミカエルの立ち上がりは、別の目的のための別の出来事であるように思われる。彼が1844年に立ち上がったのは、戸を開け、御父のもとに来て、その御国と支配する力を受けるためであったが、ミカエルの立ち上がりは、すでに持つておられる王としての力を、悪しき者の滅びとご自分の民の解放において現すためである。第11章の最後の勢力がその終わりに至り、彼を助ける者がひとりもいなくなるときに、ミカエルは立ち上がる。この勢力は、神の真の教会を踏みにじる最後のものである。そして真の教会はいまなおキリスト教界全体によって踏みにじられ、排斥されているのだから、最後の抑圧的勢力はまだ「その終わりに至った」のではなく、ミカエルもまだ立ち上がってはいない。聖徒たちを踏みにじるこの最後の勢力は、黙示録13:11-18に示されている。その数は666である。ジェームズ・ホワイト『小さな群れへの言葉』8。

スミスが「ダニエル書第十一章における『最後の勢力』」の主題について、いわゆる「新しい光」を提示したとき、ジェームズ・ホワイトはスミスの適用を新しい光ではなく、土台に対する攻撃と見なした。ユライア・スミスとジェームズ・ホワイトの間で生じた、ダニエル書第十一章における「北の王」としてのローマをめぐる論争には、特有の特徴があり、預言の学徒としての私たちは、それをローマの象徴に関するアドベンチスト

史における他の論争と合わせて取り扱うべきである。

それらの属性の一つは、私的解釈の導入である。もう一つの属性は、その私的解釈の適用には平易な文法をねじ曲げることが必要になるという点である。というのも、スミスは、36節におけるあらゆる預言的属性がローマを指していることを無視しただけでなく、文法構造が、36節の王は前の箇所を示されている王と同一でなければならないことを要求していることも無視したからである。

もう一つは、その私的解釈が根本的真理の拒否であったということである。もう一つは、それが「預言の霊」の権威の拒否を表しているという点である。もう一つの特徴は、ローマに関する最初の誤った考えが、人類の恩恵期間の終わりに近づくにつれて人が自らの衣を保つことを許さないような予言的モデルへと導いてしまうことである。また、彼の私的解釈を公然と押し広めることをいとわなかったことも挙げられる。さらに、その私的解釈が決まって「新しい光」として見なされるという点もある。これらすべての特性は、「あなたの民の略奪者たち」に関する現在の議論の中に表れている。

「あなたの民の略奪者たち」を指し示すローマの最初の論争によって型として示されていたローマの最後の論争が、ウライア・スミスとジェームズ・ホワイトの論争における預言的な筋道と結び合わされると、ある一派が、基礎的真理を退ける独自解釈に基づいて自分たちの預言モデルを築いていることが分かるだろう。

根本的な真理を拒むことは、その根本的な真理を力強く擁護している預言の霊の権威を自動的に拒むことを意味する。そのような人々は、世界中の神の民にその教えが及ぼさる影響についてどのような懸念が提起されようとも、自分たちの見解を公に示すこともいとわないだろう。

1844年直後、アドベンティズムの第一世代において、ローマをめぐる別の論争が提起された。その論争は、誤った見解がアドベンティズムの第三世代で受け入れられるまで、論じられ続けた。私たちは現在検討している「行に行を重ねる」モデルの六つのラインのうち第四として、「daily」をめぐる論争を考察する。

しかし、ローマをめぐる論争の第四の筋道に入る前に、前回の記事で、ダニエル書十一章十節を扱った際に私たちが次のように述べたことを心に留めておく必要がある。「十節はまた、レビ記二十六章の『七つの時』を隠された歴史と直接結びつけている。しかし、その真理の筋は、ここで私たちが提示している範囲の外にある。」

1863年に「七つの時」を退けることの先頭に立ったのは、ユライア・スミスであった。彼は、1856年に『レビュー』に掲載された、ハイラム・エドソン執筆のその主題に関する記事群で提示された知識の増加を、すでに退けていた。スミスが「七つの時」を提示した運動に関わっていながら、その後まさにその主題に関する知識の増加を退けたという事実の含意については、スミスが「北の王」の主題に関して自ら新しい光だと主張して提示したものの特質という本稿の主題からも外れる。しかし、ローマをめぐるアドベンチストの論争の系譜の概観を終えるとき、私たちは、ダニエル書11章10節の意義と、1856年に「七つの時」に関する知識の増加とともに到来したラオデキアのメッセージをスミスが拒絶したことが何を示しているのか、の双方に再び戻ることにする。

第一、第二、第三の天使のメッセージに関して、私たちの信仰は正しかった。私たちが通ってきた大いなる道標は動かしがたい。地獄の軍勢がそれらを土台から引きはがそうとし、成功したと思って勝ち誇るかもしれないが、彼らは成功しない。これらの真理の柱は永遠の丘のように確固として立ち、人間のあらゆる努力がサタンとその軍勢のそれと相まっても、動かされることはない。私たちは多くを学ぶことができ、これらの事柄がそのとおりかどうかを確かめるために、絶えず聖書を調べるべきである。伝道、223。

預言の歴史における私たちの針路を示す真理の偉大な道標は、取り壊され、真の光ではなく混乱をもたらす理論に置き換えられることのないよう、細心の注意をもって守られなければならない。Selected Messages, book 2, 101, 102.

「今この時、聖所の問題に関する私たちの信仰を揺るがそうとする多くの試みがなされるだろう。しかし、私たちは動揺してはならない。私たちの信仰の土台からは、針一本たりとも動かしてはならない。真理は依然として真理である。確信を失う者は誤った理論へと流され、ついには、何が真理であるかについてこれまで私たちが得てきた証拠に関して不信に陥っている自分に気づくことになる。古い道標は守られなければならない。私たちが針路を見失わないためである。」『Manuscript Releases』第1巻、55ページ